

## インテリアデザインコンペ 2020 審査会を終えて

特別審査員 3 名（町田ひろ子アカデミー 町田ひろ子校長、一般社団法人日本フリーランスインテリアコーディネーター協会 江口恵津子会長、インテリア スタylingプロ 越川洋平代表）よりコメントをいただきました。



左から越川代表、町田校長、江口会長

### ◆町田先生

このコンテストのプレゼンテーションボードの完成度が高く、とてもうれしく感じました。全体的な感想は、内容や何を伝えたいのか、インテリアファブリックスをどのようにこのコンテストの中でアピールするか、又位置づけるかというところにそれぞれの考え方の差が出てきて、審査も散らばったようにすごく多様化して面白くなったと思います。

### ◆江口会長

今回課題を A と B に分けたというのはすごく良いアイデアだったと思いました。A のほうが特に目をひく作品が多かったというのは、やはり「大阪」という限定テーマをきっちり決まっていたということが出す方も提出する方も考えが深く追求できたのかなと思います。

た。この新しい試みはすごく良かったのではないかと思います。

特に大阪らしさとか副題の大阪万博から発想した SDGs とか日本らしさとか各々立体感とか面白さとか、それから何よりもファブリックの使い方ということで大変面白く見せていただきました。

ファブリックの可能性というのがものすごく示されたという点では優秀賞の皆さん、特に秀逸な作品だなと思います。このコロナ禍の時期にみなさん書かれていると思いますが、大変心にしみいるような優しい形の提案がすごく多かったというのがとても読ませていただいて嬉しく思った感想です。とても技術的には高くなっているというのはまさに実感しているところです。

#### ◆越川代表

全体的にはコンセプトが同じような作品が出てくるのではという勝手な予想をしていたのですが、違う発想が沢山あるので、それにまず驚きました。特に課題 A のほうは、大阪で、万博で、ファブリックで、という皆同じようなものが出てくるのではと思っていましたが、見事に個性がいろいろあって幅の広さに驚いたというのが正直なところです。

あと、テキスタイルの重要性っていうのかな、それを感じました。テキスタイルによって空間が変わる。デザインにしても風合いにしても、その大切さっていうのと、もうひとつは多様性ですね。使い方で全く変わる、空間の雰囲気が変わる、そこにすごく驚かされたというか、テキスタイルを見直したというそんな1日でした。

#### ◆町田先生

今回のテーマの絞り込みは、かつてない具体的なテーマで、もしかしたら本当に作ってもらえるのではないかというような、応募者にそういう興味を頂いてもらえたからこそバラエティーのあるものが出たのかなという感じがします。

それゆえに一言加えると、大阪というイメージがこのようなイメージをもって応募する人が多いのだなというような、少し伝統とかパターンだとか、ライフスタイルということに、日本の万博ということで、日本を特に意識しすぎてパターン化された人もいて、それにこだわらずに、そこから発想してくださった方の作品に斬新さを逆に感じたという部分もあるので、私としては完成度の高さよりも、多少フレキシブルで、なにか未来を感じさせてもらえるようなものに注目して選ばせていただいたというところがあります。

又、ファブリックというのは、コロナ禍という時期にあっては、まだまだ私たちの生活には大切な素材なので、その可能性をもっともっと皆さんに提案していただけることを今後も期待したいということを感じるコンテストでした。審査員それぞれオープンに言い合いながら審査できました。ありがとうございました。

---

インテリアデザインコンペ 2020 募集テーマ 「空間を装うインテリアファブリックス」  
テーマに沿ってファブリックスを使用し、インテリアの可能性を自由に発想したインテリア空間の作品を募集。作品は、下記の課題【A】と【B】のいずれかのシーンを選択。審査は課題別には行わず、同一基準のもとで審査しました。

**【課題 A】** 人とつながるゲストハウス

2025年の大阪万博に際し、開催地近郊で“自分が泊まってみたい”“旅行者に泊まってほしい”と思うゲストハウス内の「共用スペース」空間を、ファブリックスを使って自由にデザイン、コーディネート。

**【課題 B】** 泊まりたくなる 旅先インテリア

ホテルや旅館、ゲストハウス、民泊施設、個人住宅などの「ゲストルーム（個室）」空間を、ファブリックスを使って自由にデザイン、コーディネート。